

中国出土資料学会會報

2024年12月7日 第79号

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学東洋文化研究所 小寺研究室内 中国出土資料学会（事務局）

Tel : 03-5841-5843 e-mail : office@shutsudo.jp

<http://www.shutsudo.jp/>

◆目次◆

2024年度第1回大会（総81回）報告.....	1
特別寄稿：「中国簡帛學國際論壇2024:簡帛・經典・古史」参加記 宮島 和也（成蹊大学）.....	4
学会彙報.....	4

《2024年度第1回大会（総81回）報告》：2024年7月6日（土）成城大学

ハイブリッド開催

（I）「もの」に課された賦——秦末漢初の賦制の一考察——

杉浦 仁誼（学習院大学大学院博士後期課程）

本報告は、里耶秦簡にみえる遷陵県において「もの」で課された賦について、どういった目的と手段によって徴収されたかを分析したものである。

また本報告で論じる賦とは、本来は民が国家へと軍事的貢献によって納めるべき負担を「もの」にて代納したものである。

第一章では遷陵県において「繭賦」と表記されている布帛で課された賦に着目し、それが戸ごとに課された後に県廷にて加工されたこと、またこれらが秦漢帝国の律令に見える金布律に関連するものであると論じた。また「繭賦」は遷陵県においては戸ごとに徴収された賦であると述べた。

第二章では羽で課された賦である「羽賦」に着目し、それが戸ごとに課された「繭賦」とは異なり、県が主導して羽を一定数徴収し国家に納める賦であったと論じた。これらは「皮革」などの武器の原料として用いられる「もの」と同じく、県の共有物として県の倉・庫に集められ必要に応じて賦として中央へと徴収されるものであったと指摘した。またこれらは『西漢走馬楼漢簡』にみえる「舟」での賦とも関連し、県にて「舟」を共有するために賦として徴収されたと述べた。

第三章では徴収された賦はどういった制度に基づいて徴収されたものかを考察し、史料中に見える「斂賦」との関係性を指摘した。また「もの」の徴収が必要に応じて徴収される臨時的なものであると論じた。

最後に本論の内容をまとめるとともに、他の時代にみえる斂賦は戦時下に行われたことを述べ、遷陵県における羽で課された賦は秦の対外戦争と関連する可能性があるとして論じた。

(II) 秦漢官府物資計校規範探微——以簡牘所見“效”“校”分殊與“計校相繆”爲中心 曹 天江（中央民族大學歷史文化學院）

秦漢簡牘文書中，“效”“校”都是表示核驗與審查工作的常用語，二者內涵有重合也有不同。細考相關語例可知，在官府工作場合中，“效”可表示對官吏和物資的核驗審查，且主要採取“賬一物”核對，又有“效律”作爲專門規定；而“校”可表示核驗（動詞）和與核驗相關的券書或文書（名詞），其中“校文書”指針對物資統計做出的審查說明文書，指向“賬一賬”核對的審查方式。在此基礎上，再比對秦律有關“計校相繆”的規定與其他以賬一物核對方式進行物資審查的規定，并對照秦漢簡牘材料中出現的類似語例，可發現二者在懲罰力度上有輕重之別，這正因爲“計校相繆”的“計”“校”皆指文書，“計校相繆”是經由賬一賬核對發現的帳簿紙面上的謬誤，所以懲罰比賬一物核對發現的偏差爲輕。這是秦漢國家建立後，官府計校規範不斷深化的一重表現。

(III) 《樂浪出土兩件式盤的重新復原》

程 少軒·阮 千慧（南京大學文學院）

上世紀二十年代，朝鮮樂浪遺址出土了兩件式盤，分別為石巖里 M201 式盤和王盱墓（M205）式盤。近百年來，很多學者對這兩件式盤作了研究，取得了不少成果。在仔細觀察兩件式盤的圖像資料之後，我們認爲這兩件式盤仍有贖義可以探討，式盤復原圖亦可改進。本文便是對這兩件式盤進行重新復原的嘗試。

石巖里 M201 式盤殘存天盤可復原如下：

《特別寄稿》 「中國簡帛學國際論壇 2024:簡帛・經典・古史」 參加記

宮島 和也 (成蹊大学)

2024年10月26~27日、香港浸会大学にて香港浸会大学饒宗頤国学院・武漢大学簡帛研究中心・シカゴ大学クリール中国古文字学センターの共催による「中國簡帛學國際論壇 2024:簡帛・經典・古史」が開催された。「中國簡帛學國際論壇」は2006年から継続して開催されているシンポジウムとのことで、筆者は今回が初めての参加であったが、これまでに参加されたことのある会員も少なくないだろう。

まずは以下に報告者とタイトルを報告順に列記する(当日変更されたものもあったが、プログラム所載のものをそのまま記す)。

夏含夷(SHAUGHNESSY, Edward): 再論清華大學藏戰國竹簡的真實性——答葉翰教授

劉國忠: 從清華簡看《逸周書》的三「訓」篇

黃冠雲: 清華簡《赤鳩之集湯之屋》的字裡行間

范麗梅: 從清華簡《五紀》之「桓」說上博《互先》之「誼」與「主」

程少軒: 清華簡《四時》「十又二歲乃合」小考

宮島和也: 試談清華簡《楚居》的語言特徵

梅 林(POLI, Maddalena): 清華簡《畏天用身》研讀札記

李博威(LEBOVITZ, David J.): 清華簡《周公之琴舞》演唱結構重探

亞當・施沃慈(SCHWARTZ, Adam Craig): 梳理安大簡「孔子語錄類」散文文獻《華繁》篇的體例和主題特點

鄧佩玲: 清華簡《大夫食禮》「大夫迈警(速)之義(儀)」句的釋讀及其相關問題

趙曉斌: 荊州棗紙簡《詩書之言》摘引《羽訐》與傳世本《古文尚書・大禹謨》

葛覺智(GREBNEV, Yegor): 「書」類文獻中互相矛盾的論述

周博群: 淺談上古漢語中的「重」、「力」互用現象

張喜儀: 《莊子》三種無為觀探微

芊開樂(PULINI, Michele): 從出土文獻的角度再論上古漢語派生型態與同源詞的問題

海老根量介: 岳麓秦簡「穀」字考——兼談《日書》中的「穀(穀)」

沈培: 談談出土醫書和傳世醫書跟「洩」搭配的從「廷」、從「呈」和從「罌」之字的訓釋

陳鴻圖: 出土文獻與《楚辭》名物考釋

范常喜: 漢簡名物中若干「柜」字合證

蔣文: 從「蜀郡作牢」到「君幸酒」: 淺談漆器題銘中的特殊省略

雷海龍: 漢代觶、卮、樽考辨

李天虹：包山楚簡官文書簽署文字「××哉之」「××爲李」補識
于夢欣：楚遣冊簡所記「斗」補釋
魯家亮：江漢地區戰國秦漢遣策書寫格式的變化及其原因新探
武致知：讀什麼？初識墓葬裡的文學
來國龍：安大簡《仲尼曰》中的反切拼音字
陳偉：禁「里人令軍人得爵受賜者出錢酒肉飲食之」令復原與解讀
何有祖：岳麓秦簡所見繫囚設施試解
徐剛：張家山漢簡《津關令》與漢初的地域格局
田天：張家山 336 號漢墓《朝律》與文帝初年的政局
章瀟逸、丁善泉：長沙五一廣場東漢簡牘「王廣不縱周順案」文書再探
楊振紅：周初平定商邑之亂與歷史記載之變形
郭珏：早期中國識讀群體的社會史考察
宮宅潔：戰爭與貨幣——秦的佔領統治與半兩錢的流通
劉國勝、趙翠翠：試析秦漢日書中圖、表寫作的幾種特殊現象
肖芸曉：正本中的副本：睡虎地漢簡《質日》的字迹、代筆、與他人事務
金鍾希 (KIM, Chong Hi)：秦、漢初中大夫令的雙重管理結構
費安德 (FECH, Andrej)：從北大漢簡《妄稽》和《毛傳》看漢朝正妻與妾室之分
馬增榮：漢初中尉考：以張家山 336 號墓《功令》為中心
沈思聰：甲渠候官誡北部、吞遠部轄隧情況新論——兼談甲渠候官河南道上塞各部郵書路線的分布
黃浩波：同縣同隧：西北漢簡所見戍卒的部署原則
劉欣寧：臨澤黃家灣灘西晉簡冊中的分產與繼承

報告者は中国大陸・香港・台湾・日本・韓国・アメリカ・イタリアの各地から参加しており、「国際」論壇というに相応しい構成だったと思う。また特筆すべきは、ベテランの研究者が参加しつつも、筆者と同年代あるいはそれ以下の若手の研究者も多数参加していたことである。筆者も含めて今回が初参加の報告者も少なくなく、若手研究者が世界各地で簡帛研究に従事していることを改めて実感でき、良い刺激を得られた。

多種多様なタイトルを一見して明らかなように、歴史学・思想・言語学・文学など様々な領域の報告が行われ、(もはや月並みな表現になってしまった感もあるが)簡帛研究の学際性を体現するものであったと言えるだろう。上記の 42 件の報告を 2 日間で行い、しかも同一会場で全員が一堂に会して報告を聞くスタイルであったため、スケジュールは非常にタイトであった。しかし同時進行の分科会形式で行われる学会とは異なり、筆者の専門分野以外の最新の研究成果や学界の動向を知ることができ、また欧米の研究を中心にあまり馴染みのない手法を用いた研究に触れることがで

き、非常に有意義であった。例えば、清華簡の真偽問題について、アメリカの学界ではいまだに議論が-具体的には偽物であるという主張が行われているようである(多くは出土資料や中国古典の専門家ではない研究者によるものだそうだが)。近年の日本や中国の学界ではもはや議論の俎上にも乗らなくなってきた感のある話題だが、地域や学問的背景によって関心や問題意識の所在が異なることを改めて実感した。

個人的には「疫情」以来しばらく会えていなかった友人や先生方に再会し、さらには名前は存じ上げていてもお会いしたことのなかった先生方とも交流でき、大変嬉しい機会となった。学生時代にある恩師が「論文の著者と実際に会って付き合いができると、論文を読む際に、頭の中で文章がその人の声で再生され、論文の理解度も格段に上がる」と仰っていたが、そうなることを期待したい。また、休憩時には「旁聴」していた学生が声をかけてくれ、今回の報告内容のみならず、筆者が以前発表した論文についても鋭い質問を投げかけてくれた。近年は便利なオンライン学会も増えているが、遠い異国に出かけていき、対面での学会に参加する醍醐味を再認識する機会となった。

「疫情」以降、何度か海外に渡航する機会があったものの、以前に比べて感覚が全くもって鈍ってしまっていた。周知のように今年は夏が長く、10月末の香港も気温は高かったが、香港の夏は室内が非常に「寒い」ということ(ホテルのエアコンの初期設定温度は16度であった)、コンセントの形状が日本とも中国大陸とも違うことなどなど、諸々すっかり失念しており、四苦八苦してしまった。賢明な会員諸氏には無縁のことかもしれないが、渡航先の情報の確認にはどうぞ改めてご留意ください。

なお、本シンポジウムのより詳しい様子や写真は下記 URL にて公開されている。次回の「中國簡帛學國際論壇」も、来年の同時期に香港で開催される予定とのことである。

<https://mp.weixin.qq.com/s/n5vYZUqN2TMi9BeVpA117Q>

《学会彙報》

○大会委員会より

(1) 2024年度第1回大会(総81回)が、2024年7月6日(土)に成城大学で開催されました(ハイブリッド開催)。

○会報委員会より

(1) 会報(年2回発行)は2020年度から学会ウェブサイトにおいて公開することといたしました。

なお、会報発行の際にはこれをメールでお知らせするなどしております。事務局にメールアドレスをご登録いただいていない会員の皆さまは、ご登録のほどよろしくお願ひいたします。

(2) 2012年7月21日に開催された臨時総会において、「中國出土資料學會著作権規定」が承認さ

れ、即日施行されました。本会報については第 46 号（2011 年 3 月発行）から同規定が適用されます。対象となる各号掲載の著作物の利用に際しては、同規定の定めるところにより処理されることとなりますので、希望される方は、HP 掲載の利用申請書をダウンロードして事務局まで申請してください。

(3) 年 2 回の大会開催時に合わせて発行される本『中国出土資料学会会報』は、新しい学術情報をできるだけ早く提供することを目的として編集されています。

会員各位におかれましては有益な情報を入手されたら、是非とも会報委員会に原稿の提供をお願い致します。中国における最新の学界動向、遺跡発掘の様相、学会参加記、新刊紹介など、広く提供するに足ると感じられた情報であれば何でも結構です。

原稿は随時受け付けておりますので、事務局宛電子メールの添付ファイルとしてお送りください。会報の内容を一層充実させるため、会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○機関誌委員会より

(1) 機関誌『中国出土資料研究』の投稿は紙媒体・郵送による方式を廃止し、下記の通り行います。ふるってご寄稿願います。

- ・ご投稿の際は、メール（宛先：office@shutsudo.jp）で玉稿の電子データをお送り下さい。郵便で紙媒体等をお送りになっても受理いたしかねます。
- ・ファイル形式は、WORD（～.docx または、～.doc）形式です。外字は画像データ貼付でお願いいたします。
- ・文書のレイアウトは、WORD 横書きの標準的なものでお願いいたします。レイアウトを機関誌のそれに合わせないで下さい。
- ・図表が含まれるなど、WORD ファイルのみでは玉稿の正確な内容が反映されない場合は、そのような PDF ファイルもお付け下さい。

(2) 『中国出土資料研究』第 29 号の締切について

2010 年度大会（2011 年 7 月 16 日開催）、2011 年度大会（2012 年 3 月 10 日開催）および 2023 年度大会（2023 年 7 月 1 日開催）にて、『中国出土資料研究』の投稿要領改定が承認されております。第 29 号の投稿締切日は、2024 年 12 月末日です。会員諸氏のふるってのご寄稿をお待ちしております。

○事務局より

(1) 事務局では中長期的に見て経費節減が求められること等の理由により、大会案内等紙媒体の送付停止、および学会ウェブサイトとメールでのご連絡を継続することといたしました。ご不便をお感じになる方もおられるかもしれませんが誠に恐縮ですが、どうぞご理解賜りますようお願い申し上げます。

(2) 年会費は、ゆうちょ銀行の以下の口座にご入金下さい。

口座番号：00180-5-13124 受取人：中国出土資料学会

なお会費は、

通常会員・準会員	年額 4 0 0 0 円	
学生会員・海外会員	年額 2 0 0 0 円	です。

(3) 住所変更等が生じた場合は、メールにて下記アドレス宛にご連絡下さい。

office@shutsudo.jp